OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『源氏物語』における季節矛盾の再検討
Author(s)	瓦井, 裕子
Citation	詞林. 2013, 53, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67653
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『源氏物語』における季節矛盾の再検討

瓦井　裕子

はじめに

『源氏物語』には数箇所の不審な季節表現がある。それは例えば次のようなものである。

伊予介、神無月の朔日ごろに下る。（略）今日ぞ、冬立つ日なりけるもしるく、うちしぐれて、空のけしきいとあはれなり。ながめ暮らしたまひて、

過ぎにしもけふ別るるも二道に行く方知らぬ秋の暮かな

（夕顔・①・一九四～一九五）

源氏は亡くなった夕顔と今日下向する空蝉を思って「行く方知らぬ秋の暮」と詠む。しかし、これは神無月、冬に詠まれた歌であった。歌や会話で実際の季節とは異なる季節が語られるこのような現象（以下、「季節並立」とする）は、他にも篝火巻・藤裏葉巻・若菜上巻に一例ずつ、葵巻に二例が見える[1]。

田中新一氏は当時の四季区分が暦月に加え、二十四節気によっても行われたことを指摘し、二十四節気上の季節を適用することで、この現象を説明しようとされた[2]。しかし、当該箇所のように暦月（神無月）も二十四節気（冬立つ日）も同一の季節を示す場合、矛盾は依然として横たわる。

この問題は葵巻の一例を除き[3]、田中氏以降長く扱われなかった。篝火巻で、秋に「夏の月なきほど」と言う源氏の言葉に対し、『弄花抄』の「秋もいまたあつき比は大かた夏の心あり其儀也[4]」を引く新編全集、『細流抄』と田中氏の論を挙げる新大系、同趣旨の集成も、その他の箇所については沈黙を貫いている。

『源氏物語』において季節が極めて重要な役割を持つことは言を俟たず、例えば六条院四季の町の崩壊は作品における大事件と考えられてきた。それにも関わらず、この明らかに奇異な季節上の現象は看過されてきた。正常に運行する季節が源氏の栄華を保障するからこそ、そこからの逸脱が反転した画像のように季節表現の方法を浮き彫りにする。同様に、季節並立を通してしか浮かび上がらない『源氏物語』の季節表現は確かに存在するだろう。

本稿はこのような季節並立現象に考察を加え、『源氏物語』の季節表現の一端を明らかにすることを目的とする。その際、季節提示の方法を端緒に、物語展開の枠組みとなる季節を視座として考察したい。

なお、本稿の考察対象は正編に限定する。季節並立が正編のみに見られる現象であること、また既に多くの指摘があるように、正続の間で季節表現が大きく異なり、同列の分析は危うさをはらむことがその理由である。

一、季節提示の方法

『源氏物語』が季節の選択を極めて慎重に行っていることは、早くに上坂信男氏が、

「夕霧」巻は、「鈴虫」巻の夏秋を挿んで、翌年すなわち源氏五十才の秋冬を背景に描かれる。およそ季節を飛ばすということは、場面設定にもっとも適当な季節を選ぶということであり、「夕霧」巻が秋で始まり、巻の三分の二が秋を背景に展開しているというのは、内容と背景との関連という意味でも注目に価すると思う。[5]

と指摘され、また渋谷栄一氏が、

源氏物語では、季節と物語とが密接な関係をもって語られている。春を背景として語られる物語とその主題――ここでは個々の物語あるいはその場面等の限定した意味で用いる――たとえば、人生の節目節目にあたるような、(1)誕生、(2)異性との出逢い、という主題が春を季節的背景として多く語られ、(3)密会及び密通、(4)病気や妊娠という主題が夏を季節的背景として多く語られ、(5)死別や(6)生別離という主題が秋及び冬を季節的背景として多く語られるという傾向である。[6]

と述べられた通りである。物語と季節が有機的に関わる『源氏物語』は、季節を均等に推移させ、また描くことを初めから企図していない。

正編において描かれる季節は百五に上る。そして当然、その季節になったことを示す表現を伴っている。それは例えば、「二月の二十日あまり、南殿の桜の宴せさせたまふ（花宴・①・三五三）」のように暦月を示すもの、「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ（花散里・②・一五四）」のように景物や行事を示すもの、「御わざなども過ぎて、事ども静まりて、帝もの心細く思したり（薄雲・②・四四九）」のように、共通認識のある一定期間の経過を示すものなどがある。また、直接的に、

秋のころほひなれば、もののあはれとり重ねたる心地して、その日とある暁に、秋風涼しくて虫の音もとりあへぬに、海の方を見出だしてゐたるに、入道、例の後夜よりも深う起きて、鼻すすりうちして行ひいましたり。（松風・②・四〇三）

と、春夏秋冬の語をもって明示するものもある。この多様な

提示方法は、季節が画一的なものではないのと同様、季節を明らかにするという目的のための単なるバリエーションではないだろう。

上坂氏の問題とされるのが小野と宇治という限定的な場であるように、また渋谷氏が物語と主題の関係を「傾向」と言われるように、長大な『源氏物語』全体に季節と内容の一致を想定することは出来ない。

蛍巻の夏を例にとってみよう。源氏の懸想に対する玉鬘の困惑から始まるこの巻は、以下のように季節を明示する。

兵部卿宮などは、まめやかに責めきこえたまふ。御労のほどはいくばくならぬに、五月雨になりぬる愁へをしたまひて、「すこしけ近きほどをだにゆるしたまはば。思ふことをも片はしはるけてしがな」と聞こえたまへるを、……

（蛍・③・一九六）

源氏は蛍兵部卿宮の恋を煽りながら、抑えがたい玉鬘への思いを自制する。「五日には」宮と玉鬘の贈答を描いた後、物語の視線は六条院で催された馬場の競射に移る。この日、源氏は珍しく花散里の許に泊まった。「長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば」、六条院の女君たちは絵や物語に熱中し、玉鬘を相手に物語論、紫上には姫君の教育について語る。その後話題は夕霧と雲居雁の恋に移り、続いて内大臣の夢見が語られる。

舞台は夏の町を中心とする蛍巻に移った。しかし、夏の町に住む玉鬘への懸想から起筆しつつも、物語は行事、花散里、そして春の町に住む紫上と明石姫君へと展開していく。同じ夏の内ではあるものの、多岐にわたる事象が描かれている。

では、薄雲巻の次のような例はどうだろうか。

冬になりゆくままに、桂の住まひいとど心細さまさりて、上の空なる心地のみしつつ明かし暮らすを、君も、（略）「さらばこの若君を。かくてのみは便なきことなり。思ふ心あればかたじけなし。対に聞きおきて常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、袴着のことなども人知れぬさまならずしなさんとなむ思ふ」と、まめやかに語らひたまふ。

（薄雲・②・四二七）

松風巻からの懸案事項だった明石姫君養女の件が、薄雲巻冒頭で顕在化する。明石君は苦悩と逡巡を経て、遂に姫君を手放すことを決心する。

うち泣きつつ過ぐすほどに、十二月にもなりぬ。雪、霰がちに、心細さまさりて、あやしくさまざまにもの思ふべかりける身かな、とうち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつ見るたり。雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出でゐなどもせぬを、汀の氷など見やりて、……

（薄雲・②・四三一～四三二）

明石君の悲嘆と大堰の厳峻な冬の景は一体となって語られ、物語は冬の深まりと共に進行する。「この雪すこしとけ」た頃、

源氏は姫君を引き取るため大堰を訪れた。姫君は六条院の生活に馴染み、紫上に気に入られて無事に袴着を終える。源氏は残された明石君の嘆きを思いやって頻繁に文を遣わすが、紫上ももはやそれに口をはさむことはない。

薄雲巻の冬は明石姫君の処遇問題に始まり、六条院に引き取られた後の関係者の様子を描いて幕を下ろす。その間、物語は明石姫君養女の物語というひとつの主題しか扱わない。しかも単に一つの主題を語るのではなく、その問題の発端から解決までをすべて薄雲巻の冬という枠組みの中で語るのだ。このように、薄雲巻の冬は明石姫君をめぐる葛藤の舞台であり、同時にその心情を内包するように描かれている。

このような季節の用い方は、例えば玉鬘巻にも見られる。筑紫から上京した玉鬘の不安と共に、玉鬘巻の秋は始まる。

いぶせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくままに、来し方行く先悲しきこと多かり。豊後介といふ頼もし人も、ただ水鳥の陸にまどへる心地して、つれづれに、ならはぬありさまのたづきなきを思ふに、帰らむにもはしたなく、心幼く出で立ちにけるを思ふに、従ひ来たりし者どもも、類にふれて逃げ去り、本の国に帰り散りぬ。

（玉鬘・③・一〇二）

最優先課題であった上京に成功すると玉鬘一行は新たな試練に直面し、彼女の不安に即して秋の到来が語られる。状況を打開すべく参詣した長谷寺への途次、今は六条院に仕える右近と偶然にも再会し、彼女の現状は源氏の知るところとなる。源氏は彼女を迎えとるべく準備を進め、紫上にもその理由を打ち明けて、円満な六条院入りを目前に玉鬘巻の秋は終わる。玉鬘の苦境から始まった秋が六条院入りという望外の解決を得て終わるまでを、この秋は描くのだ。問題の提起からその帰着までを一貫して描く方法はここにも見られた。

二、枠組みとしての季節

このような描写の在り方に共通するのは、その季節が提示される際に春夏秋冬の語を伴うということである。これは正編を通しての顕著な傾向だ。次頁の表に一覧を挙げた。二十九例中二十二例が一貫した主題のみを描いており、その中でも実に十五例が、問題の提起から決着に至る構造を有している。蛍巻の夏のように、暦月や景物などの提示によって到来の語られる季節がこのような構成をほぼ取らないのに対し、春夏秋冬の語をもって提示される季節の特殊性は際立っている。これはおそらく、ある季節の内にひとつの物語を展開させようとするとき、その枠組みとしての季節をより強く意識したため、提示においても春夏秋冬の語を用いたことの結果であろう。

	一貫したテーマあり
	一貫したテーマがあり、かつ起承転結の形をとる

巻	四季の提示	四季提示から始まる季節に語られる内容
桐壺	その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて	桐壺更衣、病篤く退出 桐壺更衣、死去 桐壺更衣の葬送 桐壺更衣に三位追贈、人々哀惜
	見たてまつる人さへ露けき秋なり	桐壺帝、若宮を恋しむ 桐壺帝、靫負命婦を更衣邸に遣わす 命婦、更衣邸を訪れ故人を偲ぶ 命婦帰参し様子を語る。桐壺帝いよいよ哀惜 桐壺帝、楊貴妃の故事に桐壺更衣を思う 弘徽殿女御、管弦の遊びを行う 人々、桐壺帝の歎きを案ずる
	明くる年の春、坊さだまりたまふにも	第一皇子立坊し、人々安堵する
夕顔	秋にもなりぬ	藤壺への想いから葵上への訪れ、間遠 六条御息所へ夜離れ、御息所の嘆き 御息所邸の朝の風情 惟光、夕顔邸の様子を報告 夕顔に耽溺する

巻	四季の提示	四季提示から始まる季節に語られる内容
夕顔	秋にもなりぬ	中秋の夜、夕顔邸に滞在 翌日、六条某院に夕顔を伴う 物の怪、夕顔を取り殺す。 夕顔の遺体を東山に移す 源氏の嘆き 東山を訪れ夕顔と最後の別れ 源氏、重く患う 病癒え、夕顔の素性を聞く
末摘花	春のつれづれにまかでぬ	末摘花を訪ね、琴を聞く 頭中将と戯れる 頭中将と末摘花を競う
	心の暇なきやうにて春夏過ぎぬ。秋のころほひ、静かに思しつづけて、かの砧の音も	夕顔への哀惜から末摘花への興味が募る 末摘花と逢う 満足せず、夕方に末摘花へ後朝 行幸の準備にかまけ、末摘花への訪れを怠る
葵	この秋入りたまふ	斎宮、内裏に入るが、御息所の体調すぐれず 葵上の容体急変 源氏、葵にとり憑いた物の怪を見る 葵、夕霧を出産 御息所の苦悩 源氏と葵上、語らう 葵上、死去

巻	四季の提示	四季提示から始まる季節に語られる内容
葵	この秋入りたまふ	人々の悲しみ 葵上の葬送 御息所と歌を贈答、御息所の嘆き
賢木	紅葉やうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたる	源氏、雲林院に参籠 源氏と紫上、消息 源氏と朝顔斎院、歌を贈答 二条院に帰還
	夏の雨のどかに降りて	藤壺に紅葉を贈る 朱雀院と語らう 頭弁、源氏に叛意ありと諷する 藤壺の方に参内し、歌に思いを託す
須磨	冬になりて雪降り荒れたるころ	源氏と頭中将、韻塞を行う 朧月夜と密会 右大臣、密会を知り、源氏放逐を画策 源氏たち、都を思い嘆く
明石	明石には例の秋は浜風の異なるに	明石君、源氏との身分差を思い気乗りせず 明石一家、召人扱いさせまいと思案にくれる 明石君と逢う 源氏、時々明石君を訪れる
澪標	その秋、住吉に詣でたまふ	源氏と明石、それぞれ住吉に参詣する 明石君、源氏の威光を実感し、我が身のつたなさを嘆く 御息所の近況

巻	四季の提示	四季提示から始まる季節に語られる内容
澪標	その秋、住吉に詣でたまふ	病重く出家した御息所を訪ねる 御息所、源氏に娘の将来を頼む 御息所、死去
蓬生	冬になりゆくままに、いとどかきつかむ方なく悲しげに	禅師君、源氏の御八講に招かれ、様子を末摘花に語る 叔母、末摘花を迎えにきて説得する 末摘花と侍従、別れを惜しむ 源氏、方々を思いながらも訪ねず
関屋	またの年の秋ぞ常陸は上りける	石山寺に参詣途中、常陸守一行と行きあわせる 小君を呼び語らう 空蟬、源氏を思い独詠 参詣の帰途、小君が参上し文の使いを務める 源氏と空蟬、歌を贈答
松風	秋のころほひなれば、もののあはれとり重ねたる心地して	明石一家の別れ、明石君たち上京する 明石君を訪れる 桂で饗応する 源氏、嫉妬する紫上に姫君を養女とする件を相談する
薄雲	冬になりゆくままに、桂の住まひいとど心細さまさりて、	明石君に姫君養女の件を相談 明石君、養女の件で思い乱れるが説得される 明石君と乳母、歌を唱和 明石君、姫君を手放す 二条院での姫君 明石君の嘆き

巻	四季の提示	四季提示から始まる季節に語られる内容
薄雲	入道后の宮、春のはじめよりなやみわたらせたまひて	藤壺の病状悪化 冷泉帝、藤壺を見舞う 藤壺、死去 人々、藤壺の人柄を偲び、哀惜 藤壺を偲び独詠
	秋ごろ、二条院にまかでたまへり	秋好、二条院に退出 秋好を訪れ、慕情を訴える 春秋優劣論、秋好は秋を推す 明石君を訪れ、明石君の憂悶慰められる
玉鬘	さま変えたる春の夕暮れなり	大夫監、玉鬘に求婚する
	秋にもなりゆくままに、来し方行く先悲しきこと多かり	玉鬘、先行きの見えない生活を嘆く 玉鬘、長谷寺に参詣する途次、右近と再会する 一同、長谷寺に参詣 右近と三条、玉鬘の将来を相談する 右近、玉鬘の現状を源氏に語る 源氏と玉鬘、歌を贈答 玉鬘の住居を夏の町に定める 紫上に玉鬘を引き取る事情を語る
篝火	秋になりぬ	玉鬘に懸想、歌を唱和する 頭中将の子息、玉鬘のもとで奏楽

巻	四季の提示	四季提示から始まる季節に語られる内容
藤裏葉	その秋、太上天皇になずらふ御位得たまふて	准太上天皇となる 内大臣、夕霧、昇進する
柏木	秋つ方になれば、この君はゐざりなど	
横笛	秋の夕のものあはれなるに	夕霧、落葉宮邸を訪ね、琴を弾く 夕霧、柏木遺愛の笛を譲られる 亡き柏木、夕霧の夢に現れ笛を求める 夕霧、薫に会い、その容貌に柏木の面影を求める 源氏、夕霧から笛を預かる。それぞれの思惑。
鈴虫	夏ごろ、蓮の花の盛りに	女三宮の持仏開眼供養が行われる 源氏、女三宮の身辺に心を配る
	秋ごろ、西の渡殿の前	女三宮の住居を造り替える 女三宮に慕情を訴える。女三宮、これを厭う 中秋に人々来たりて宴 冷泉院、歌を贈る 源氏たち、冷泉院へ参上 源氏、秋好中宮の出家の志を誡めるが、ますます志強くなる
御法	夏になりては夏の暑さにさへ	紫上、病状 明石中宮、退出して紫上を見舞う 紫上、二条院を匂宮に譲り遺言

巻	四季の提示	四季提示から始まる季節に語られる内容
御法	秋待ちつけて、世の中すこし涼しくなりては	中宮、参内間際に紫上を訪れる 紫上、死去 紫上落飾を夕霧に諮る 紫上の葬儀 源氏・夕霧、紫上の死を嘆く 帝・太政大臣・秋好中宮、弔問 人々、紫上を哀惜する 源氏、出家を思い、仏道修行
幻	春の光を見たまふにつけても	源氏の哀傷深し 蛍兵部卿宮、源氏を訪ね歌を唱和 源氏、紫上を嘆かせた過去を悔いる わが生涯を思う 涙もろさを恥じて人と対面せず 遺愛の桜をいたわる匂宮を見て悲しむ 女三宮を訪れてかえって紫上を思う 明石君と語るも心慰まず

枠組みとしての季節については後藤幸良氏の論がある。具体的物語から観念を抽出する方向とは逆に、観念が具体的物語を生み出す、その構想的枠組としての機能に、特に注目しておきたい。（略）春が物語の時間的位置を示しつつ、物語内容の構想的枠組となる、そのような様相を看取できるのではないか。(7)

氏は季節と主題の関係について渋谷氏とは逆の方向性を指摘される。稿者はある物語を語る場として季節が選ばれたという上坂氏や渋谷氏に近い立場を取るが、それでも季節を「構想的枠組」と捉えられたことは重要な指摘だと考える。構想的枠組を想定するなら、物語は必ずひとつの季節の内に収まるよう描かれるはずだからだ。

物語をある季節の枠組みの中に描こうとするとき、四季提示はかなり意図的に行われたと考えてよい。というのも、次のような例が見出せるからである。

世の中の事、ただなかばを分けて、太政大臣、この大臣の御ままなり。権中納言の御むすめ、その年の八月に参らせたまふ。祖父殿ゐたちて、儀式などいとあらまほし。（略）その秋、住吉に詣でたまふ。

（澪標・②・三〇一～三〇二）

源氏政界復帰後の人々の動静に触れるこの箇所で、かつての頭中将の娘が「その年の八月」に入内したことが明らかになる。本来ならこれによって秋になったと判断出来るのであるが、物語はさらに「その秋」と断って、源氏の住吉参詣を語る。この秋に展開される物語は表面的にこそ一貫した主題を持たないが、住吉参詣を軸として明石君を再登場させ、彼女と非常に密接な関わりのある六条御息所を死によって退場させる。これまでにも六条御息所と「ほのかなるけはい」の「いとようおぼえた」る明石君が一体的に語られてきたことを考慮すると、言外にある主題を想定すべきであろう。住吉

参詣とこれに続く物語をこの秋の枠組みの内に語ろうとする意図、近況報告とはまったく異なる次元で澪標巻の秋を語りなおそうとする意図が、この四季提示から窺えるのだ。

四季提示はこのように、他の季節の提示方法とは一線を画すものである。物語を語る枠組みとしての季節を一層強く意識させるものでもあるし、その枠組みの起点を示す記号にもなりうるのだ。

三、夕顔巻末尾と四季提示

さて、ここでは最初に提起した季節並立に話を戻し、四季提示との関連から検討したい。以下は夕顔巻末尾の引用である。

伊予介、神無月の朔日ごろに下る。「女房の下らんに」とて、手向け心ことにせさせたまふ。また内々にもわざとしたまひて、こまやかにをかしきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小袿も遣はす。

逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちにけるかな

こまかなることどもあれど、うるさければ書かず。御使帰りにけれど、小君して小袿の御返りばかりは聞こえさせたり。

蝉の羽もたちかへてける夏衣かへすを見ても音はなかれけり

思へど、あやしう人に似ぬ心強さにてもふり離れぬるかなと思ひつづけたまふ。今日ぞ、冬立つ日なりけるもしるく、うちしぐれて、空のけしきいとあはれなり。ながめ暮らしたまひて、

過ぎにしもけふ別るるも二道に行く方知らぬ秋の暮かな

（夕顔・①・一九四～一九五）

十月初旬、餞別の中にかつて小袿を見つけた空蝉は、源氏への返歌に十月一日の冬の更衣を詠み込んだ。折しも立冬の日、それに相応しくしぐれる空を源氏は物思いに沈んで見つめている。傍線部のように、冬の到来がここでは繰り返し示される。暦月暦日、初冬の行事、さらには二十四節気上の立冬が語られている。立冬立春などが当該箇所以外で言及されることはなく、作中特異な季節表現を有している。

しかし、この執拗なまでの冬の描写の後に詠まれる源氏の歌には、はっきり「秋の暮」という文言が見える。「過ぎにし」夕顔と「けふ別るる」空蝉が自らの手の届かぬところへ去ってしまったこの秋の暮れ――これを〈秋も終わりに近い今日〉と解すか〈秋の夕暮れ時〉と解すかは説の分かれるところだが、いずれにせよ自らを秋の範疇に置いて詠んだ歌であることに変わりはない。「あきはて、けふはかりとそなかむれはゆふくれにさへなりにけるかな」[8]（『源賢法眼集』・九月はつるひ）のように、暮れゆく秋のこの夕暮れ時と解すのが妥当だろうか。

注釈書もこの現象に興味を抱く。『細流抄』は、

過にしは夕かほの上けふわかるゝは空蟬也これは十月の歌なるを秋のくれ哉とよめる余情類なき也哥の道かやうの所に心をつくへき事也[9]

と、この季節を違える表現を絶賛する。『弄花抄』も以下のように言う。

立冬なれとも秋暮とよめり大やうなる心にや　篝火にも此類あり[10]

しかし、これを「類なき」「余情」の和歌表現とだけ理解して良いのであろうか。最初に述べたように田中氏はこの現象を、

「暦月流にいえば冬十月に入り、五、六日になっても、立冬までは秋（九月節）」という節月意識が揺曳している。[11]

と説明されるが、この場面では冬になったことが強調され、立冬を迎えたことで二十四節気上の秋からも逸脱する。しかも、作中一般的に見られる現象ではなく、五十四帖の内このような例は六例しかない。特殊の事情を想定すべきだろう。

では、源氏の詠む「秋」は彼にとって、そして物語にとってどのような季節であったのか。

秋にもなりぬ。人やりならず心づくしに思し乱るることどもありて、大殿には絶え間おきつつ、恨めしくのみ思ひきこえたまへり。六条わたりにも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなのめならんはいとほしかし。（①・夕顔・一四六～一四七）

秋は葵上・六条わたりの女との関係を描き四季提示によって始まった。六条での「絵に描かまほしげ」な朝の情景を挟んで、物語の焦点は夕顔に移る。夕顔の花をめぐる夏の贈答の後、興味を抱いて探らせていた女との交渉がようやく始まった。源氏は素性も分からない夕顔に執心し、八月十六日、六条某院で彼女を失う。翌晩、夕顔の遺体と対面を果たした帰りに源氏は病を得、「二三日になりぬるに」病状はますます悪化する。「二十余日」の間重篤な病に苦しんでようやく治癒した頃には、秋ももう終わりかけていた。

九月二十日のほどにぞおこたりはてたまひて、いといたく面痩せたまへれど、なかなかいみじくなまめかしくて、ながめがちに音をのみ泣きたまふ。（略）右近を召し出でて、のどやかなる夕暮に物語などしたまひて、……

（夕顔・①・一八三～一八四）

九月二十日頃、源氏は夕顔が頭中将の語った常夏の女であることをようやく確認する。その後、空蟬・軒端荻との贈答を挟み、夕顔の四十九日の法要、夕顔の宿のその後を描いた後、空蟬下向に繋がっていく。夕顔の四十九日は十月初旬に行われたのだろうが具体的な日付などは伴わず、秋に包括されるように描かれている。

ここにも四季提示に特徴的な方法が取られている。謎に満ちた夕顔との交渉から始まり、彼女の死、それに誘発される

ような篤い病からの回復を経て、素性を知るまでが秋の内に展開される。夕顔の最も印象的な場面の一つと考えられている「心あてに……」の贈答は夏の出来事だったが、源氏にとって夕顔は紛れもなく秋の女君であった。物語もまた、出会いの発端や夏の花・夕顔をこの女君に関連づける描写にも関わらず、源氏と彼女の本格的な交渉を秋の内に描くのだ。

「行く方知らぬ」と源氏の詠む「秋」は、夕顔への耽溺と哀惜に支配されている。空蟬の下向という新たな別れに際し、源氏は失った夕顔を想起せずにはいられない。夕顔の記憶に立ち戻るとき、彼の心は実際の季節から離れ、夕顔との思い出深い秋に遡行していく。そうして、冬にあって秋と詠むこの特異な現象は生まれたのだ。

そして、このような季節並立表現を可能にするのが、四季提示から始まる季節の枠組みだった。夕顔の物語が秋を枠組みとして展開されるからこそ、「行く方知らぬ秋の暮」が夕顔を偲ぶ心を如実に表す「余情類なき」表現として、冬の一日に成立する。「秋の暮」は季節上の矛盾をはらんではいるものの、秋に描かれる夕顔物語の構想としては一貫していると言えよう。

四、葵上の物語

六条院構想に伴って、薄雲巻あたりから女君と季節が急速に結び付けられていくことは知られているが、一方でまた六条御息所と秋のように、物語初期から特定の季節と結び付けられる女君も存在する。夕顔もそんな女君の一人であった。六条御息所の場合は秋に繰り返し登場し、夕顔は一つの秋と共にある。しかしそのような場合だけでなく、季節を問わず登場する女君の中にも、突如として季節と結び付けられる人物は存在する。葵上はそういう女君であった。

桐壺巻で源氏の添臥となった後、うちとけがたい正妻として登場する彼女の実態は掴みがたい。個人の性質よりも左大臣家の姫としての性格の顕著な彼女を物語が女主人公として取り上げるには葵巻を待たねばならない。冒頭近く、葵上の懐妊が語られる。夏のことであった。

心苦しきさまの御心地になやみたまひてもの心細げに思いたり。めづらしくあはれと思ひきこえたまふ。誰も誰もうれしきものからゆゆしう思して、さまざまの御つつしみせさせたてまつりたまふ。かやうなるほど、いとど御心の暇なくて、思しおこたるとはなけれど、途絶え多かるべし。（葵・②・二〇）

源氏は身重の葵上に「あはれ」と感じるが、それは葵上本人よりも初めて我が子を身籠ったことに対する感慨であった。続いて語られる車争いの顛末を耳にした源氏は、葵上の気質にその原因を求め、「なぞや。かくかたみにそばそばしからでおはせかし（葵・②・二七）」と嘆息する。

車争い以降憂悶を深める六条御息所に続いて語られる葵上

は、既に物の怪に苦しめられていた。

大殿には、御物の怪めきていたうわづらひたまへば、誰も誰も思し嘆くに、御歩きなど便なきころなれば、二条院にも時々ぞ渡りたまふ。さはいへど、やむごとなき方はことに思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、心苦しう思し嘆きて、御修法や何やなど、わが御方にて多く行はせたまふ。

（葵・②・三一～三二）

「さはいへど」と正妻としての葵上を思いやり「便なきころ」を打ち消すこの叙述からは、葵上の不例によって行動を制限される源氏の不満がにじむ。源氏の配慮は左大臣家を負った正妻に対して向けられている。

葵上への抑えがたい憎悪に捕われた六条御息所の煩悶と共に、季節は秋に移る。

斎宮は、去年内裏に入りたまふべかりしを、さまざまさはることありて、この秋入りたまふ。九月には、やがて野宮に移ろひたまふべければ、二度の御祓のいそぎとり重ねてあるべきに、ただあやしうほけほけしうて、つくづくと臥しなやみたまふを、宮人いみじき大事にて、御祈祷などさまざま仕うまつる。（略）大将殿も常にとぶらひきこえたまへど、まさる方のいたうわずらひたまへば、御心の暇なげなり。

（葵・②・三七）

直前までは「やむごとなき方はことに思ひきこえたまへる人」と、その後ろ盾の重さゆえに尊重された葵上は、ここでただ「まさる方」と、身分や立場の制約を受けずに語られる。彼女の容体はそれに起因する他の女君たちへの訪問の間遠さと併せて語られていたが、もはや他の女君は影すら見えない。病床の六条御息所を熱心に心配できない理由として、今回は周囲への遠慮ではなく彼自身の心情が語られるのだ。また、源氏は病床の葵の上を見て、その美質に気付かされる。

御几帳の帷子ひき上げて見たてまつりたまへば、いとをかしげにて、御腹はいみじう高うて臥したまへるさま、よそ人だに見たてまつらむに心乱れぬべし。まして惜しう悲しう思すことわりなり。（略）御手をとらへて、「あないみじ。心憂きめを見せたまふかな」とて、ものも聞こえたまはず泣きたまへば、例はいとわづらはしう恥づかしげなる御まみを、いとたゆげに見上げてうちまもりきこえたまふに、涙のこぼるるさまを見たまふは、いかがあはれの浅からむ。

（②・葵・三九）

初めて心の通い合った二人が描かれ、葵上死去の直前、御所に参内しようとする源氏は再び葵上の美しさに触れ、「年ごろ何ごとを飽かぬことありて思ひつらむ（葵・②・四五）」と不満を抱いてきた長い年月を自省するまでになる。直後、葵上は亡くなり、「八月廿余日の有明」に葬送が行われた。以降、残りの秋は葵上の追悼に費やされる。

長く登場するため看過されがちだが、以上のように彼女は

葵巻に至って急速に秋の女君としての性格を付与されていく。秋の訪れと共に源氏の心が葵上に向き始め、ようやく夫婦らしい関係になれたのも束の間、同じ秋のうちに葵上が亡くなり彼女を哀悼するという、秋の中に収められた葵上物語が描かれる。そして、ここにも夕顔巻末尾のような季節並立が見られるのだ。

以下は源氏が葵上の喪に服し、左大臣邸に留まっている最中の出来事である。

時雨うちしてものあはれなる暮つ方、中将の君、鈍色の直衣、指貫うすらかに更衣して、いとををしうあざやかに心恥づかしきさまして参りたまへり。（略）これは、いますこし濃やかなる夏の御直衣に、紅の艶やかなるひきかさねてやつれたまへるしも、見ても飽かぬ心地ぞする。中将も、いとあはれなるまみにながめたまへり。

「雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてながめむ

行く方なしや」と独り言のやうなるを、

見し人の雨となりにし雲居さへいとど時雨にかきくらすころ　（葵・②・五四～五五）

頭中将は十月一日の更衣を機に喪服の色を薄くした。既に季節は秋から冬に移っている。だが、源氏はまだ更衣も行わずに元の喪の色のまま、変わらず葵上を偲んでいた。同日、源氏は大宮と歌の贈答を行う。

若君の御乳母の宰相の君して、

「草枯れのまがきに残るなでしこを別れし秋のかたみとぞ見る

匂ひ劣りてや御覧ぜらるらむ」と聞こえたまへり。げに何心なき御笑顔ぞいみじううつくしき。宮は、吹く風につけてだに木の葉よりけにもろき御涙は、まして取りあへたまはず。

今も見てなかなか袖を朽すかな垣ほ荒れにし大和なでしこ　（葵・②・五六～五七）

源氏は葵上を「別れし秋」、去ってしまった秋と表現する。葵上が逝去した八月だけでなく、ようやく心を通わせた秋全体を、源氏は念頭に置いていよう。

また同日、源氏は朝顔斎院にも歌を贈る。

空の色したる唐の紙に、

「わきてこの暮こそ袖は露けけれもの思ふ秋はあまたへぬれど

いつも時雨は」とあり。御手などの心とどめて書きたまへる、常よりも見どころありて、「過ぐしがたきほどなり」と人々も聞こえ、みづからも思されければ、「大内山を思ひやりきこえながら、えやは」とて、

「秋霧に立ちおくれぬと聞きしよりしぐるる空もいかがとぞ思ふ」

とのみ、ほのかなる墨つきにて思ひなし心にくし。

（葵・②・五七～五八）

物思いをする秋は幾度も経験してきたが、この夕暮れは取り分け涙がちになると詠む源氏は、ここで自らを秋に置いている。実際の季節を離れ、心だけが葵上に愛情を向けた秋に立ち戻る。移り変わる季節、流れる外的時間に逆行するように、更衣を行わず「もの思ふ秋」と詠む源氏の姿が描かれる。

そして、やはりこのような表現の行われる秋が四季提示によって始まっているのは注目に値する。葵上物語を語る枠組みとして秋を利用するからこそ、季節を遡る源氏の心情や言葉が、一貫した構想に基づく表現として成立するのだ。季節という枠組みにおける四季提示の意義を看過すべきではないだろう。

源氏はこの日、頭中将・大宮・朝顔斎院と歌を贈答し、すべての歌に季節もしくは季節性の高い景物を詠みこんでいるが、今を秋として詠むのは朝顔斎院に対してだけであった。朝顔斎院はその歌に対して「秋霧に立ちおくれぬ」、秋霧に取り残されているとし、季節が既に冬であることを前提に歌を返す。秋に遡行するのは源氏の心情のみで、外的時間は滞りなく進んでいく。更衣を済ませた頭中将と夏の喪服を着続ける源氏、秋と詠む源氏に冬と返す朝顔斎院の対比は、現実の季節と乖離していく源氏を一層鮮やかに際立たせる。だが、この日詠まれた歌の中で、なぜ朝顔斎院のみに「秋」と詠みかけたのか、ここでは指摘に留めておく。

おわりに

以上、『源氏物語』正編において四季提示から始まる季節に物語展開の枠組みとしての機能があることを指摘し、季節並立の問題について論じた。女君の物語をその枠組みの中で展開することによって、源氏の心情が実際の季節を離れ、思い出の季節へと遡行していく。その結果として季節並立という一見矛盾した季節表現がとられるが、それは季節の枠組みに付随する事象であり、構想的な一貫性が見られると結論づけた。

詳述を行わなかった篝火巻の季節並立も同様である。玉鬘への物狂おしい思いを夏の枠組みの中に語り、秋に「夏の月なきころ」と源氏に語らせている。勿論、玉鬘巻の秋も四季提示「秋になりぬ」から始まっている。

先に述べたように、夕顔巻の季節並立箇所は暦月・二十四節気・年中行事という三種の異なる方法を用いて、畳み掛けるように冬の到来を示す異例の季節提示の方法をとっている。それは、季節並立とそれに表象される源氏の心情をより鮮やかに描きだすためであったと考える。葵巻は冬の歌の贈答を重ねた最後に秋の歌を置くが、作中これほど贈答歌を連ねることは珍しい。一人では持て余すほどの哀惜の表れではあろうが、一方では季節並立の異質性を強調する仕掛けとして機能している。さらに、篝火巻では秋の四季提示に続き、『古

今和歌集』秋部などの歌を繰り返し引くことによって、秋の訪れを強調する。季節並立はその一点だけではなく、それを含む場面全体の季節表現に影響を及ぼしていることを、加えて指摘したい。

注

（1）秋に「夏の月なきほど」という篝火巻、冬に行われた紅葉賀および六条院行幸を「秋」とする藤裏葉巻・若菜上巻。また葵巻は冬に「もの思ふ秋」という例および春の出来事を「かの十六夜のさやかならざりし秋のこと」とする例を持つ。この内、葵巻の後者・藤裏葉巻・若菜上巻は回想において季節並立が起こっており、それ以外とは分けて考える必要がある。今回は検討の対象としないが、稿を改めたい。

（2）田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』（風間書房　一九九〇年）

（3）清水婦久子「源氏物語における「いさよひ」の風景」『源氏物語の風景と和歌　増補版』（和泉書院　二〇〇八年）所収／初出「青須我波良」（一九九八年一二月）

（4）伊井春樹編『源氏物語古注集成　弄花抄　付源氏物語聞書』（桜楓社　一九八三年）

（5）上坂信男「小野の霧・宇治の霧――源氏物語心象研究断章――」『源氏物語　その心象序説』（笠間書院　一九七六年）／初出「言語と文芸」（一九六八年一一月）

（6）渋谷栄一「源氏物語の季節と物語――春」（「高千穂論叢」一九八八年一月）

（7）後藤幸良「『源氏物語』の春物語――物語の構想枠としての〈季節観〉――」伊井春樹他編『古代中世文学論考　第十六集』（新典社　二〇〇五年）

（8）『新編私家集大成　CD-ROM 版』（二〇〇八年）

（9）伊井春樹編『源氏物語古注集成　細流抄』（おうふう）（桜楓社　一九八〇年）

（10）注（4）に同じ

（11）注（2）に同じ

（かわらい・ゆうこ　本学大学院博士後期課程）